

十勝毎日新聞 十勝農業記事ハイライト

生産・取扱高

十勝農畜産 計3,791億円 14 J Aで最高額 19年度取扱高
本社まとめ

2020年6月21日

管内24 J Aの2019年度決算が出そろった。農畜産物の取扱高や粗生産高などの合計は3,791億7,104万円（十勝毎日新聞社調べ）。畑作が天候に恵まれて順調だったほか、生乳販売や肉用牛の取引価格も堅調で、14 J Aで過去最高の数字を記録した。各 J Aで算出方法が異なる額を単純計算したものだが、十勝地区農協組合長会などが昨年末に発表した取扱高の概算3,549億円を上回り、19年度の十勝農業の好調さを示した。

取扱高には「商系」と呼ばれる J A以外の商社は含まれていない。取扱高などは、J Aごとに交付金を含めるかどうかなど算出方法が異なるため、単純比較はできないが、昨年末発表の取扱高（3,549億円）に比べ実績ベースの数字になる。

各 J Aでは4～6月に総会・総代会を開催し、19年度の決算を発表。J A十勝清水町の317億9,900万円など14 J Aで最高額を更新した。最高額を更新した数は、昨年より6 J A増えた。

19年産の畑作は、平均気温、日照時間とも平年を上回り、全般的に生育が良好に推移。18年産が不作だった小麦は6～7月の天候が良く実が成熟し、取扱額も伸びが目立った。豆類も収量が前年を超えて堅調な価格で推移。一方、野菜は主産地が豊作で、価格が伸び悩んだ。

酪農は、良質な粗飼料が確保されたほか、規模拡大や乳価の上昇で取扱高が伸びた。ホクレンの管内生乳受託量は9年連続で過去最高を更新した。育成・初妊牛や肉牛も高値が続いた。

十勝農協連の山本勝博会長は「豆やビート、ジャガイモも豊作で、畜産も価格が高値で推移した。1年を通じて良い天候、条件に恵まれた」と話す。

関係者によると管内では商系も100億～150億円の取り扱いがあるとされ、単純計算すると4,000億円に近い規模の取扱高になる。

◆2019年度 管内 J Aの農畜産物取扱高（生産額）

J A名	取扱高 (万円)	前年度 比(%)
帯広かわにし	214億1095	▲6.5
帯広大正	157億2300	4.4
中札内村	142億5010	5.8
さらべつ	145億4200	9.7
忠類	69億7000	7.9
大樹町	147億9415	7.6
ひろお	80億6000	3.1
めむろ	312億0000	6.1
十勝清水町	317億9900	8.6
新得町	193億2500	1.1
鹿追町	223億8951	6.6
木野	36億0093	4.4
おとふけ	239億0000	2.4
土幌町	457億9000	▲0.7
上土幌町	234億4200	1.0
さつない	39億2100	▲1.9
幕別町	151億7000	▲0.5
十勝池田町	67億9900	6.7
十勝高島	32億8891	12.8
豊頃町	129億7566	4.5
うらほろ	115億5500	10.3
本別町	133億6200	5.7
あしよ	90億9592	5.6
陸別町	58億0691	▲4.3
合計	3791億7104	

▲はマイナス
■は取扱高が過去最高

小麦 2年連続20万トン超え 20年十勝産 日照不足も平年並み

2020年11月17日

ホクレンが取り扱う2020年の十勝産小麦は、前年比9.8%減の20万3,000トンになる見通しとなった。今年は6月の極端な日照不足などを受けて作柄が心配されたが、開花時期の天候の良さも受けて2年連続で20万トンを超え、平年作を確保した。収穫時期の天候もおおむね順調で、品質も1等級が多かった。

ホクレン帯広支所によると全体のうち、うどんなどに使われる中力の主力品種「きたほなみ」は19万トン（10.8%減）、パンなどに使われる超強力品種「ゆめちから」は1万2,000トン（9%増）を見込む。

今年産は6月上旬ごろの好天で受粉が良好に推移。粒の数が多く、豊作基調だった。ただ6月の帯広市内は日照時間が平年より24%少なく、下旬に限れば96%も少なかった。実の太りには光合成を促す日照が必要で、生産者らは「粒は多いが細粒傾向」と受け止める。帯広支所も「開花期後の水分不足と日照不足により、期待されたほど実が太らなかった」とする。

ただ収穫量は20万トンを超えて平年並みの水準を確保。収穫時期の7月下旬



2年連続で20万トンを超える見通しとなった十勝産小麦の収穫作業（7月、芽室町）